



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対人的コミュニケーションとしての対人恐怖：共同体と怒り
Author(s)	村澤, 和多里
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 84, 269-286
Issue Date	2001-12
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.84.269
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28841
Type	departmental bulletin paper
File Information	84_P269-286.pdf



対人的コミュニケーションとしての対人恐怖

— 共同体と怒り —

村 澤 和多里

“Taijin-kyofu” as an Interpersonal Communication The Community and Rage

Watari MURASAWA

はじめに

近年「ひきこもり」や「きれる」といった問題に象徴されるように、思春期青年期の対人関係は緊張に満ちたものとなっている。小川捷之らの研究(田中他 1994, 堀井他 1995)によると、中高生を対象にした 1981 年と 1993 年の調査から、中高生の対人不安意識に量的な顕著な増大を認められており、西田 (1968) 以来指摘される「対人恐怖症の重症化」が今なお続いていることが指摘されている¹。

上記のような傾向は、他にも数多くの研究者によって指摘されている。中村 (2000) は、「引きこもり」など対人的な不安が生じる場面を徹底的に回避するタイプの対人恐怖も増えてきていると指摘しており、『「重症型」よりさらに未分化な対人不安がむきだしになったかのようである」と述べている。鍋田 (1997) も同様の傾向を認めており、「最近では、対人緊張や対人不安、人と関係がもてないなど対人恐怖症に近似した悩みを抱くケースの治療においては、人とつながれない、あるいは、情緒的な絆を人と持ったことがない深い絶望感とも空虚感とも恐怖感ともいえるような不安が現れるケースが目立つ」と述べている。中久喜 (2000) は同様の文脈で、「21 世紀には、恐怖そのものを乗り越えるための反恐怖 (counterphobic) な行動化が起こるかもしれない。すなわち思春期の子どもたちの『キレル』行動、『加害症』は心の中の恐怖心と戦うための、反恐怖的な行動化であると考えられる」と、近年の中高生の暴力傾向と対人恐怖心性の関連を指摘している。

筆者は、このような青年たちの対人関係での緊張をとらえるためには、心理的側面の力動的解釈と社会的背景との関連をと同時にとらえていくことが重要であると考えている。この問題を捉える第一歩として、本論では「対人恐怖症」に焦点を絞り考察をする。

また、対人恐怖の心性は、笠原 (1977) なども指摘するように、日本においては青年期の一般的な心性であると考えられており、したがって、その変化をとらえることは思春期青年期の対人的苦悩の時代的变化をとらえることに通じると考えられる。

第 1 章 自己愛と共同体

対人恐怖症研究の方向性について近藤 (1985) は、文化論的立場から「われわれの社会に内

在する固有な人間や人間関係のあり方を社会分化的にどう捉えるか」という問題を提示している。

本章ではまず、対人恐怖症と青年期の共同体との関係について考察する前に、これまで対人恐怖症をめぐるどのような理解がなされてきたのか、心理的特性についての研究と、文化的背景との関連についての論及を概観する。

1. 対人恐怖の二面性

対人恐怖症についての研究では、常にその性格の二面性が問題にされてきた。一つは対人意識における二面性であり、もう一つは自己意識における二面性である。

対人恐怖症は対人関係における恐怖状態なのであるが、単なる「誰かに嫌われている」「誰かに陥れられる」という被害意識とは異なっている。そこには被害意識も感じられているのではあるが、同時に「自分が周囲に迷惑をかけている」という意識も強いことが指摘されている。

対人恐怖症者の対人意識について、山下（1970）は「人に好かれ、親しまれ、気兼ねなくとけ合うことを希いながら、それゆえに人に嫌われ、うとまれ、肩のこるつき合いづらい人間であることをはなはだしくおそれ、そのために自分を空しく」していると述べているが、山下はそこに他者に迷惑をかけることへの過剰な恐れを認め、「対人恐怖は加害恐怖ないしは加害妄想である」と指摘している。笠原（1977）は対人恐怖症者の対人関係の特長について、①「半知り」の人たちを避けること、②同年輩者が苦手なこと、③小人数グループのなかに居るときに困ること、④二人でいるときはよいが、三人になると困ること、⑤漫然たる雑談的関係を避けたがること、以上の5点をあげており、笠原（1969）では山下と同様に「他者を傷つけることをおそれる」ことを指摘している。

しかしながら、他者に対して過剰な気がねをしている一方で、内心は非常に勝気であることも多くの研究者によって指摘されてきている。

対人恐怖症者の自己意識について、森田（1974）は「恥ずかしがる事を以て、自らふがいないことと考え、恥ずかしがらないように苦心する『負け惜しみ』の意地っ張り根性である」と表現しており、同様の二面性を三好（1970）は「外面のおとなしさ」と「内心の負けず嫌い」、山下（1970）は「遠慮する気持ち」と「負けず嫌い」、内沼（1977）は「弱気」と「強気」あるいは「没我」と「我執」と表現している。

2. 精神分析学的研究

精神分析学的研究では、このような二面性について力動的解釈が試みられてきた。

対人恐怖症についての精神分析学的研究は、古くは山村（1933, 1934）によってなされた。山村は「赤面恐怖症」について研究し、エディプス葛藤をその原因とした。すなわち、父親によって性器を去勢されるのではないかとする去勢不安から、性器に向かうべき興奮が顔面に充填されてしまうとされている。性格の二面性については、去勢不安から生じた受身的「マゾヒズム」と父親との同一視による男性的「サディズム」との葛藤が引き起こされていると解釈されている。このようなエディプス葛藤を中心にした解釈は、戦後の前田（1956）や古賀（1956）によっても引き継がれている。

1970年頃には西園（1970）三好（1970）らによって、自己愛との関連が論じられた。西園は、対人恐怖症者は幼少期に過度な賞賛を得ていたために自己愛傾の段階に固着してしまい、常に

周囲からの賞賛を引き出せるような厳しすぎる（誇大な）自我理想を抱いていることを指摘した。また、三好は「うぬぼれたいが、うぬぼれきれない」という言葉で、対人恐怖症者に潜む自己愛的傾向を指摘した。三好によると、対人恐怖症者は「高く価値づけられたファンタスティッシュな幻の自己像を持ち、うぬぼれている」という側面と、「自分は他人と本質的に変わらぬ」という「他人との同一視」に重点が置かれているため「うぬぼれ切れない」側面とが混在していると指摘している。

鍋田（1997）によると、対人恐怖症者は幼少期に親からの豊富な愛情を浴びて「幼児ナルチズム」を増大させるが、しかしこのような愛情豊かな親子関係には表裏があるとされる。彼らは親の意向に背いて愛情を撤去されることへの恐れから、受身的に親の理想を内在化せざるをえず「受身的理想的自己」が形成されていく側面と、ネガティブな親子関係から「本来の自己」が形成されるという。この鍋田のいう「本来の自己」とは、見せかけの誇大性でもある「理想的自己」の仮面がはがされたときに露呈する矮小な自己である。

岡野（1998）は、対人恐怖症者について、極度に理想化された自己イメージである「理想自己」と、過度に矮小化された自己イメージである「恥ずべき自己」との二極を揺れ動き、決してその中間の自己イメージに安定することのないことを指摘している。彼らは「理想自己」の実現を希求しつつも、実際に「理想自己」が実現されそうになると、目立つことによって自分の存在が危うくなるのではないかという強い不安に襲われる。また逆に、「恥ずべき自己」ととどまることも彼らにとっては耐えられない苦痛である。人前でふるまうという「パフォーマンス状況」では、これら二極の葛藤が意識下のレベルで起こりやすいが、直接的に意識されるのは見られたくない自分の「漏れ出し」への恐れである。

鍋田（1997）や岡野（1998）はこのような「二面性」について、Kohutの自己心理学の「自己-対象」という概念をもちいて捉えようとしている。「自己-対象」とはKohut（1971）によると「対象が自己と分離、独立したものとして経験されていない」ような体験様式のことであり、原初的には乳幼児と養育者との共感的関係において体験される。通常、乳幼児期に体験されていた「自己-対象」は、共感的対応を通して非人格化された機能へと「変容性内在化」ととげるとされる。ここから鍋田や岡野は、対人恐怖症者が常に他者からの承認や共感を引き出すことに専心する傾向について、「自己-対象」的な関係として捉えており、極度に理想化された自己イメージは「自己-対象」関係を補強するための反応であると考えられている。

3. 共同体と対人恐怖

DSM III（1980）によって「社会恐怖」という概念が一般的になるまでは、対人恐怖症は日本に特有の神経症と考えられており、日本文化との関連が論じられてきた。近年、対人恐怖症は「社会恐怖」の亜型として考えられるようになってきているが、対人恐怖症の症状が時代と共にうつり変わっていることは共通認識となっており、その点ではやはり対人恐怖症は文化的背景と密接に関係していると考えられる¹¹。

対人恐怖症と日本文化との関連についての言及では、主にわが国における対人関係の特徴や、自己意識の特殊性について論じられてきた。

土居（1971）は、明治以降のわが国の社会が、「ゲマインシャフト的な人間関係からゲゼルシャフト的なそれへの変化」したことに伴い、「今日の社会の人間関係は昔に比べて容易に人を甘え

させたいのではないだろうか」と述べている。すなわち土居は、わが国近代化の途上における伝統的な「甘い許容的な」共同体の変質を、対人恐怖の発生を促す社会的要因とみなしている。また土居は、「対人恐怖は、これまで馴れ親しんだ共同体から離れて、新しい見知らぬ社会で生活せねばならなくなったときに起きることが多い」と述べている。

近藤（1964）は、対人恐怖症の根源には〈人に好かれ、よく思われなければならぬ〉という「配慮的要請」と、〈人に優越しなければならぬ〉という「自己主張的要請」との矛盾対立があると指摘している。そしてこの背景には、イエを原型とするような日本文化の配慮的性格の上に、明治以降の近代化による競争原理（自己主張的要請）が侵入してきた時代状況があったのだという。

鐘（1978）は、対人恐怖症者の見られることへの恐れを挙げ、わが国では一定の枠の中からはみ出さないように「目立つこと」を抑制する傾向が強いことと関連付けて論じている。そしてこのような心理の根底には、わが国の文化の主客未分化の混沌性があると指摘した。

近年では、鍋田（1997）は対人恐怖症と日本文化との関係について、愛されるために自分の本質的な部分を隠し、周囲にとけあっていたい、「うちとけたい」という心理を指摘している。

これらの指摘に共通しているのは、個人と共同体との調和と、共同体から分離した個人の自己主張とが拮抗している状態として、対人恐怖症を捉えられている点であるといえる。

4. 対人恐怖症と青年期集団

また、対人恐怖症は青年期の病であり、恐怖の対象は同性同年輩関係を中心にしている点にも留意しなければならない。

この点について、笠原（1977）は「対人恐怖症者が不安をおぼえる対人関係とは、けっして厳格な父親的存在との関係でも、群集を前にしての一对多数の関係でもなく、実に同性同年配者からなる小グループにおける小さな係わり合いであった」と指摘し、Sullivan（1953）の青年期発達論を参考に青年期における「同性同年輩者関係」と、その中での「個人的親密への要求」の重要性にからめて対人恐怖症を論じている。また、鍋田（1997）は精神分析学的視点に文化論的視を重ねて考察し、対人恐怖症と Kohut（1971, 1978）の例示した「自己愛人格障害」との相違の一つとして、対人恐怖症が思春期に発症することを挙げている。

また、これまでに筆者は、対人恐怖症者と対話していく中で、彼らの多くが「いじめられ体験」について語るのを聞いた（村澤 2000）。そして、その体験は彼らの対人的スタンスを決める上で大きな要因になっているようであった。しかしながら、精神分析学的な対人恐怖症論では、彼らの恐怖を家族力動のなかで説明しようとしており、彼らが日常的に怖れている「集団」との関係については間接的に取り扱われていたように思われる。

笠原（1977）も指摘しているが、対人恐怖症者は3人以上の関係で仲間はずれにされることをもっとも恐れている。特に、今日のように学校での「いじめ」が問題となっている状況では、集団との関係は難しくなっていることが予想される。青年期の病としての対人恐怖症を考える上で、集団との力動関係についてのもっと考えられるべきであろう。

5. 本論文での目的

対人恐怖症者の心理的特性についての議論と、日本文化との関係についての議論から、両者における共通認識として、対人恐怖症者の心理的二面性は、受動的に共同体に溶け込みたいと

いう気持ちと、共同体に溶け込めない個人としての自意識の葛藤であると考えられる。また、対人恐怖症が青年期に好発することからは、このような葛藤は青年期の同年齢集団との関係で起こりやすいといえる。

先述のように、これまでの研究では、両親などとの情緒の関係性については論じられてきたが、集団との情緒の関係性については十分に論じられてこなかったように思われる。そこで、本論文では、以上のような視点に留意しつつ、対人恐怖症者が同年齢集団との関係で体験している対人的プロセスを描き出すことを目的とする。

なお、以下の論では、対人恐怖症者が所属をもとめる集団のことを「共同体」、その集団との溶け込んでいる状態を「共同性」を呼ぶことにする。

第2章 事例の経過

以下に筆者が心理面接を担当した2事例を提示する。いずれも、筆者の勤務する精神化クリニックでの事例であり、面接は、主治医による薬物療法と平行して行われた。

事例を提示するにあたって、プライバシーをできる限り保護するために、本論文に直接関係しない情報は大幅に省略した。特に生育歴については、本論文では検討しないので提示していない。なお「#」は何回目の面接かをあらわす。

1. 事例1 軽度の対人恐怖を訴える青年（全22回）

クライアントのO君は20歳の男性で、来院時は本州の大学に在籍していた。

何回か浪人した末、本州のある私立大学に入学するが、友人関係になじめず孤立してしまう。その年の夏季休暇で帰省したのを機に復学できなくなってしまい、母親に付き添われて来院。

第1期 寂しさを感じるまで（#1～#3）

#1はスーツで現れるなど緊張した様子。「濃密な人間関係がつかれない」という悩みが語られ、復学できなくなった理由としては、「学生寮でルームメイトと二人の時はいいのだが、ルームメイトの友人が部屋に遊びに来ると、居心地が悪くなる。はじめは我慢していたが、だんだん負担になってきた」と語られた。このような対人関係の問題について#2では「自分が仲良くしたい相手でも、その人に友人がいると仲良くできない」、#4では「仲良くしたい友達がいても、3人以上になると、自分以外の2人の方が仲良く見えて、仲間に入れない」と語られている。

しかしながら、他方ではO君にとって対人関係を築くことが、「友人をつくと時間をとられてしまうのでは」（#1）という不安として体験されたり、友人が必要な理由として「高校では学校が情報をくれたが、大学では寮では友人や先輩に聞かないと情報から取り残される」（#2）などと現実的な利益を志向するような発言も見られた。

#3では、自己不確実感について多く話された。「去年までは漠然と医学部がいいと思い受験したが、結局合格なかったし、本当に自分のしたいことがわからなくなった」という。また、自己不確実感他に、「毎年田舎の秋祭りの手伝いをしているが、年齢が上がってくると年下の者に指示を出さなければならないのに、自分でもわかっていないので聞かれても答えられない。子供のときは人の指示に従っていたらよかった」というエピソードとしても語られた。

第2期 独りになることへの不安（＃4～＃9）

＃4では、始めに「今までの写真を見ていたら、幼稚園の時、運動会のみかん取り競争でみんなを呆然と眺めている写真で、今と同じだと思った」としみじみ語られ、「ここしばかりで、逆に、人がいるほうが安心感を得られることに気がついた」という。このころから「寂しい」という言葉がよく使われるようになり、＃5では「自分にも寂しさを紛らわせる彼女が必要かな」などと述べる。

この時期は、自分の能力や判断力に対する不確実感に悩まされつつ、現実的な体験のなかで自信を積み上げていく。自己不確実感については、「大学に戻ってからの生活が心配。いろいろなところに行くのに不安がある。飛行機に乗り遅れたり、迷子になったりしたらどうしようかと思う」（＃6）と訴えている。そして＃9では、「やりたいことを自由にしろといわれても、何をしたらいいのかわからなくない。うちの親は世の中の仕組みを教えてくれなかった。現実的な経験をさせてくれなかったので、何かしようとするときに考える材料がない」と強く両親を非難する言葉が語られた。

しかしその反面、＃5では、「大学に戻ってからのことを考えて、アルバイトの申し込みをしてきた。下見に行って、働いている男の子が自分より頼りなさそうだったので、そこで働くことに決めた」と現実的な動きが見られ始め、アルバイトはその後3ヶ月間続けられる。また、＃7では、「大学に戻るときの引越しの料金など、いろいろ調べておこうと宅急便のお店で料金表を写していたら、見かねた店員が料金表をくれた。これからは何でも係りの人に聞こうと思う」（＃7）と不安を他者とのコミュニケーションで解決したことが報告される。

また「前は無理をして医学部を目指していたが、今は無理しないで自分の能力に合ったところに行けばいいと思う」（＃7）、「サークルは“祭り”のことについて知りたいと思って“民俗学研究会”に入ったが、今考えると、合わないことをしていたと思う」などと、現実的な判断が多く語られるようになった。

第3期 自信の回復（＃10～＃15）

この時期になるとO君は徐々に自信をつけていき、「大学に復学する準備をしている。市役所の手続きは、思ったよりも難しくなかった。人には難しく考えすぎるといわれるけれど、自分では考えないと安心できない」（＃10）、「今までは小遣いで買えないものはあきらめていたが、アルバイトをするようになって、自分の好きな物を買おうと思うようになった」（＃11）と語っている。

田舎の秋祭りについて、＃10では「ゆくゆくは中心になっていかなければならない」という気負いと、「でも結局は、勝手がわからなくて役に立てないのに、無理して手伝おうとする」という無力感が語られたが、＃11では「秋祭りの神社の宮司から『今年も頼む』と電話があったけれど断った」「秋祭りの準備は誰も教えてくれなかったので、今思うと役に立てないのも当たり前だった」と、それまでのとらわれが振り切れたかのように思われた。

対人的交流について肯定的に語られることが多くなり、「最近、本屋であった中学時代の同級生と一緒に、毎朝キャッチボールをしてい。楽しいので、なぜか朝早く目がさめる」（＃14）、「高校時代の同級生に遊びに誘われて、本気で話し合えたと思う。今までは、話をする楽しさを知らなかった」（＃15）などと語られた。

対人場面でのスタンスについても、「自分が安心できるように行動している」（＃13）、「今ま

では、相手が嫌な思いをしないように気を使っていた。でも、最近は自分に重みをおいて、無理して人にあわさないようにしている」(# 15)などと、自分を見失わないようなスタンスを重視し始めている。

面接については、# 14 で「母親は、『あれしろ』『これしろ』と僕のできていないところばかりを指摘していたが、先生(筆者)は丁寧に話を聞いてくれたので『自分の思っていることを話していいんだ』と思えた。ここでは『すべては僕に任されているんだ』と思った」と語っている。また、「先生には僕と似たところがあるように思う。僕もカウンセラーになれるかな?」(# 15)という言葉も語られる。

(この後、O君は復学したが、四ヵ月後の長期休業のうちに再び面接に訪れた。)

第4期 他者に対する不安(# 16~# 22)

久しぶりに面接に訪れたO君は# 16 では「4ヵ月は何とかやっていた。寮では何人か友人ができたが、それ以上は広がらない。バレー部に入ってみたが、なじめない。こちらから話しかけても反応がないので寂しい。気を使わない奴ら、腹が立つ」と思い通りになっていない苛立ちを語る。また、帰省してからアルバイトをしているが、そこでも「何となく集団には入っていない気がする」という。

しかし# 17 では、高校時代の友人の紹介で地元の大学のアウトドアサークルに遊びに行き「僕を一員として迎えてくれた」と肯定的な体験を語る。そしてそこから「集団のなかで一員として見てもらえているかは気になる。自分の存在が受け入れられていると感じられないときには傷つく」と自分のことについて分析をする。同様のことは# 19 でも「相手が自分に興味をもっていることがわかっていないと不安になる」と表現されている。

このような自己分析を経て# 20 では「今まで、自分で勝手に『この人は僕に興味を持っていない』と判断していたところがあったけれど、自分が腹立っているのを人の性にしていたのだと思う」と語り、「だいぶ悩みがなくなってきた」と述べる。

さらに# 21 になると、4ヵ月前を振り返り「前回復学する前は自分が安心することばかりを考えていたけど、今は人とのつながりを大切にしたいと思う。でも、その分うまくいかないこともある」と述べる。# 22 では同様のことが、アルバイト仲間と意気統合して一緒にご飯を食べに行ったというエピソードとともに、「前は、自分を安心させてくれるために他人がいてくれたらと思っていた。でも、最近、人と打ちとけて話すことが楽しいと思うようになってきた。人との関わりは笑いも生み出す」と語られた。

そして、# 22 の最後に「これから、もう大丈夫だと思う」という言葉を残してO君は去っていった。

事例2 自己視線恐怖を訴える青年(全38回)

クライアントのK君は、来院時17歳の高校生であった。

自分の目つきが周囲に不快感を与えるという、自己視線恐怖を訴えて来院。このときはまだ不登校状態ではなかったが、来院して一月後には保健室登校も困難になっていた。空手では黒帯ということで、非常にがっしりした体つきをしている。

第1期 退学から引きこもりへ（#1～#3）

高校3年時に来院。当初は自分の視線が厳しすぎて周りを恐がらせているという「自己視線恐怖」を訴えていた。主治医のすすめで3回ほど筆者による心理面接を受けるが、対人恐怖感が強くなり家に引きこもり状態となったため、来院が途切れる。その間に高校のほうは中退。その後、8ヶ月ほどたったある日、再び来院し面接が再開される。

第2期 「人の顔が黒く見える」（#4～#12）

面接再開時には、（K君が「幻想」と呼ぶ）小学校の頃の断片的な記憶（人に囲まれている場面、森の場面、「誰も傷つけない」という言葉）が蘇るフラッシュバック様の現象があったが、しばらくすると、「人の顔が黒く見える」という症状も併発する（#5）。

小学校の時の記憶については次第にまとまり、結局「小学校4年のとき、仲の良かった友人が、K君の幼なじみの女の子をいじめ、ナイフで怪我をさせたときの記憶」が語られる。その事件についてK君は、女の子をかばって友人と喧嘩をしたこと、結局友人とナイフを大きな石の下に埋めて「秘密にしようとした」ことなどを覚えているという。その後、K君はその友人らと疎遠になり、しばらくしてK君が現在の住まいに転居したこともありうやむやになってしまう（#7）。（このような事件があったにもかかわらず、K君はそのころの友人関係を「よかった」と語っている。）

「人の顔が黒く見える」という症状については、逆に黒く見えているときは人の視線を気にしないで楽だと語ったが、筆者については最後まで黒く見えるとは語られなかった。

第3期 「傷つけてしまうのでは」という恐れ（#13～#20）

面接では症状についての報告が熱心に語られ、それとともに対人場面での恐れや「傷つけてしまうのでは」という加害恐怖がくり返し語られた。彼は、「喧嘩したら勝てるけど、自分も相手も傷つけない」（#9）と語る反面、自分でも統制がきかず家で暴れてしまうことなど（#10）、自分の攻撃性を取り扱いかねていた。外出した時の感覚については、「何かと闘っているような感覚を抑えている」と表現している（#11）。このような攻撃性については、#17で「自分のテリトリーに干渉されたり、やり方を否定されると、我を失ってしまう。こうと決めたことを邪魔されるとカーッとになってしまう」と述べている。

#13の前からは、母親のすすめで神経症者の自助グループに参加するようになり、その後徐々に深い関係をつくっていく中で、お互いの症状について語り合い、自分の症状について次第にまとまった理解を語るようになる。#16では対人恐怖症の始まりについて「保健室で休んでいたことを仮病と思われるんじゃないか」という不安が一番始めだったと語り、#18では更に遡り「ナイフ事件を境に、親友でも裏切るんだと思うようになってしまった」ことや、「中学のときにイジメにあっていたのに、両親に『そんな理由で塾をやめるのはダメ』と言われたときに、親でも裏切るんだと不信感を抱いた」ことなどが語られる。また同じ#16には、「今考えると、〈普通〉に見えるように頑張ってきたんだと思う」との述べている。

面接では彼の苦しみをなぞるような応答を心がけていたが、#13ころにはK君に筆者の関西弁がうつり、また#18では筆者の絵を描いていることが報告され、#19では筆者の服装をまねた装いで現れるなど、急速に筆者のイメージを取り込んでいることがうかがわれた。

第4期 現実との接触と不安（# 21～# 28）

その後、空手教室で子どもに教える役などを引き受けるなど積極的な面が目だったが、症状の方は悪化を報告し、「しばらくは面接が必要」という。筆者は、K君には筆者との関係に確信がもてない不安があるのではないかと考え、症状とは関係なくしばらく面接時間が保証されていることを確かめる（# 21）。

このころからしばらく、「自分に対して嫌悪感」（# 21）や、交通事故のばらばら死体の話（# 22）、自助グループでの孤立感（# 23）などネガティブな話が続いたが、# 24ころから自助グループの仲間と遊びにいった話や、彼女ができたことなどを楽しげに語るようになる。# 25では、それまでは「次の人の面接あるでしょ」などと時間に気を使っていたのが、退室渋りをするようになった。

またこの頃から、自助グループの下部集会としての「若者の集い」で中心的役割を果たすようになる。

第5期 生の感情を表出するまで（# 29～# 38）

29では「人の顔は黒く見えるけれど、緊張するのはない。治った感じがする」と述べ、# 30ころから自動車学校に通うかどうかの迷いと、交際中の彼女と友人の関係が相談の中心になる。# 36では、人の顔も黒く見えなくなってきたことが報告されたが、他方で友人たちがK君が面接に通っているのを知り「そんなやつとは付き合えない」と排除されたことを話す。# 37では「結局僕は友人に友情を強要していたのかもしれない。友情は一方的には成立しないのに……」と語り、これまでの人づき合いのパターンを告白する。その日は雨だったのだが、その雨を眺めつつ「雨の日にはみんな教室にいて、何となく一人にならずにすんだ。」「小学5年で転校してから友人ができなくて、持っていないものを持っていると嘘までついて友人をつくろうとした。でも結局誰も残らなかった」などという話がなされた。自らの惨めな部分をさらけ出しているかのようであったが、筆者はただ傾聴し、K君の虚しさと寂しさをなぞろうとすることしかできなかった。

38では、その前の週にお盆で親戚が集まったことが話された。生まれてから初めて会う叔父や片足を失いながらも力強く生きる祖父とともに墓参りをし、「先祖に怒られているような気持ちになった」と語る。また、自助グループのメンバーに「お前らは逃げているんだ」と言ったと語り、「物事はやってみないと分からない。今までくだらないものに縛られてきた」と述べる。非常に深い虚無感に襲われている印象であったが、K君の何かが吹っ切れたようにも思われた。そして# 38の最後に、もう症状はないので面接を終了したいと述べる。

面接はここで終了したが、結局その後もK君の方からの来院や手紙で筆者との関係は保たれている。また、自助グループや「若者の集い」との関係も続いているようである。最近の手紙では、高校に復学し卒業証書をもったこと、アルバイトを長期で続けていることなどが報告されている。

第3章 考察

1. O君の対人関係の変化

来院当初のO君の対人関係の特徴は、対人場面で自分だけ取り残されたような不安になり、

対人関係に踏み込めないというもので、いわゆる軽度の対人恐怖症に相当すると考えられる。しかしながら面接開始時に語られたO君にとっての悩みは、必ずしも対人関係についてのものではなく、他者から「情報をもらえない」(#1)「情報から取り残される」(#2)ことに関する悩みであった。むしろ、人と関わることは「時間の取られる」(#1)やっかいなことと感じられており、この段階では、他者の存在は自分にとっての道具として意識される側面が強かった。

しかし次第に「仲間に入れない」(#4)という悩みが重点を置くようになり、「人がいるほうが安心感を得られることに気がついた」と、他者との情緒的交流についての肯定的な感情が語られる。また、#5では「寂しい」という言葉が口にされるようになり、その後もこの言葉はたびたび口にされ、アルバイトなど現実に対人関係をもとめる動きも現れている。

#6以降で話された不安の大半は、〈誰にも力になってもらえない〉というものであった。筆者は「誰かに聞けばいいのでは？」(#6)などとO君が苦手な“人に頼る”という方法を提示したが、これはO君にとっては新鮮な視点だったらしく、その後O君は、些細なことでも人に聞くようになった。その間にO君は、他者に“ものを尋ねて応えてもらう”ということを通して、ささやかなものであれ自分の欲求を受け入れてもらえるという体験をつんだと考えられる。これは面接場面でO君が体験したこととも重なり合っており、後に経過を振り返って「先生が丁寧に話を聞いてくれたので『自分の思っていることを話していいんだ』と思えた」(#14)と述べている。それ以前のO君は、ささいなことを尋ねることにさえ“邪魔になるんじゃないか”と気兼ねをしていたと考えられる。

第3期になってO君は、はっきりとした自己主張ができるようになる。#9でも、自分に社会的能力が不足していることについて「うちの親は世の中の仕組みを教えてくれなかった」「今は、親の悪い面ばかりが見えてしまう」と不満を述べているが、第3期になると相手に直接的に不満をぶつけることができるようになった。第2期で経験した“ものをたずねて応えてもらう”という反射体験を経由して、逆に“ものをたずねても答えてくれない”ということへの不満が意識化されてきていると考えられる。筆者との関係では、O君は「先生だったら……わかてもらえる」(#14)「先生には僕と似たところがある」(#15)などと、筆者との感情的な一体感を体験していることがうかがわれた。

「秋祭り」についての話題は、第1期の#3ですすでに出現しており、O君にとっての「とらわれ」の中心となっていたことが考えられる。秋祭りの体験についてそれまでは、「答えられない」(#3)「勝手がわからなくて、役に立てない」(#10)と無力感とともに語られており、O君にとって自尊心を著しく傷つけられる体験であったと考えられる。O君はこの時の自尊心の傷つきを修復することにとらわれ続け、全生活の方向性がその努力に結びついていた。O君がその大学を選択し、「民俗学研究会」に入会したのも、「秋祭り」のことを調べ、祭りの役に立とうとしていたことが動機となっていた。O君は自分が傷ついた体験を、その場に戻ってやり直したいという気持ちが強かったようである。したがって、#11で夏祭りへの参加を拒否し、宮司に対して不満を述べられたことは、これまで生活を支配していた「とらわれ」から解き放たれた大きな転機であったと考えられる。

また、#10では今まで買えないとあきらめていたものを自分の稼いだお金で買おうとするなど、欲求の高まりや楽しいという感情についても話され、不満を溜めておかずに解決するための具体的な行動に出るようになっていく。

第4期は、復学を果たしたものの、現実の大学生活の中で全てが予定どおりに進むわけではなく、不安になった時期である。この時期にはO君は仲間に入れないことを、自分の問題として考えるようになり、#17では「自分の存在が受け入れられていると感じられないときには傷つく」と述べている。再び「寂しい」という言葉が語られるようになったが、思い通りに受け入れてくれない他者たちに対して「腹が立つ」と怒りも表明している。

しかしながら、この寂しさや怒りは、アルバイト仲間などとの交流の中で、「一員として迎えられた」という感覚や、一緒に笑うという体験していくことで次第に癒されていったものと考えられる。対人恐怖の方も、「この人は僕に興味を持っていない」という感覚が、もはや対人関係を危機に追いやるような不信としてではなく、「自分勝手な思い込み」と考えられる様になっていく。

2. K君の対人関係の変化

K君は当初、非常に視線に対して敏感になっており、家の中にいてカーテンを閉めていても落ち着かないような状態であった。この時期に一時的に引きこもり状態となるが、後に自力で再来を果たせたことから、引きこもりは状態が悪化することからの自衛の手段であったと考えられる。

しばらくして再来したK君は再び面接を希望し、筆者との関係は安定するが、断片的なイメージのフラッシュバック様の現象である「幻想」や「顔が黒く見える」ということを訴えるようになる。しかしながら、K君の場合、これらの訴えは、K君の「自己」が傷つくことから守るような複数の機能を果たしていたように思われる。一つ目はK君自身も述べているように、人の顔が黒く見えることによって視線を気にしないですんだということである。二つ目は症状が続いている限りは筆者との関係も途切れないという「絆」の役目である。三つ目は症状によって他の人とは区別された特別な存在として自分を意識できることである。このような機能によって、K君の場合は症状によって、「傷つくこと」から守られていたと考えられるのであるが、それは同時に生身の関わりから疎外されることと裏返しであった。彼は常に「普通に見える」ことにこだわり続けていたのであるが、何の構えもなしに集団に参入することには強い恐れを感じていた。だが、一時の「引きこもり」の状態と比較すると、ある種の防御壁を介したものであるとはいえ、外出や対人的接触という面では改善が見られるともいえるであろう。

第3期には、K君は恐怖感や加害感について多く語るようになる。彼の恐怖には二つの側面がある。一つは〈裏切られるの〉という恐れと、もう一つは〈誰かを傷つけてしまう〉という恐れである。

〈裏切られる〉という恐れについては、彼が何度も同年齢仲間集団への参入を失敗していることが影響していると思われる。K君は、小学5年で地方部から都市部に転校したのを機に、さまざまな手を使っても友人を得ることができず孤立してしまったと語っている。また、中学時代に塾でいじめにあったこと、その時に両親にさえ助けてもらえなかったことなどが、人に対する不信感の原因として語られている。〈誰かを傷つけてしまう〉という恐れについては#17で、自分の意向を受け入れられていないと感じる時に怒りが湧きあがることが語られている。

これら二側面ともに関連する出来事として、フラッシュバック様の「幻想」の主題である、小学校のときの「ナイフ事件」が位置付けられる。K君は「ナイフ事件を境に、親友でも裏切るんだと思うようになってしまった」(#18)と述べているように、一つの外傷体験となってい

ることが考えられる。この事件は、加害性によって共同性に亀裂が入った体験であり、その加害性の原因であるナイフは大きな石の下に隠し「秘密」にしたと語られている。この記憶の真偽はともかくとして、〈共同性を破壊するような加害性を隠す〉というテーマが象徴的に現れている事件であるといえる。(ただしこれを原初的な外傷体験と解釈するかどうかは慎重になるべきであろう。)

第4期になると、自助グループや空手教室など現実の集団との関わりが増えてくるが、同時に不安も増していたようである。バラバラ死体の話や、祖父が片足を無くしたことなど、身体のみとまりが損なわれるというイメージが語られている。しかし筆者との関係では、まだ「症状」を介してではあるが、かなりストレートに依存欲求を向けられるようになってきている。この時期は、K君の不安や欲求がかなり生に近い形で表出されるようになった時期であるといえる。

第5期は、「顔が黒く見える」という訴えもなくなり、自動車学校に通うかどうかなど、現実的な課題への取り組みが多くなっていたが、そのような状況の中で友人からの拒絶を体験する。この拒絶はK君が最も恐れていた共同性の崩壊イメージそのものであったが、ある意味では必然的に起こった事件とも考えられる。というのは、K君は特定の友人には「俺たち親友だろ」と強いつながりを希求していたが、集団に対してはやや距離を置こうとしていたため、不協和を避けられなかったからである。第5期の悩みの大半は、交際中の恋人と親友、友人たちといった複数の対人関係のなかでの葛藤が主題にいたが、この葛藤は個別的な親密性を優先するか、集団との関係を優先するかといったものであった。

面接の最終回(＃38)で語られた祖父についてのエピソードは象徴的であった。＃22では「バラバラ死体」という不安の文脈で語られていた「片足を失った祖父」というイメージが、「片足を失っても力強く生きていく」という力強いイメージとなって語られている。「傷ついても力強く生きてゆく」という意識の持ち方は、この回の他のエピソードにも見て取れ、自助グループでは「お前ら逃げてるだけだ」と、傷つくことから逃げる姿勢を糾弾している。

K君はこのような意識の劇的な変化と共に、面接も後にするが、その背後では自助グループのメンバーや交際中の恋人との親密な関係が大きな支えになっていたと思われる。また、筆者との関係も切れてしまったわけではなく、ことあるごとに会いに来たり、手紙をくれたりなど、対話の相手として内面化されているようである。K君は友人の裏切り体験によって、人との共同性に大きなダメージを受けたが、それにもかかわらず人との関係は生き残ったといえるであろう。

3. 孤立無援感と共同体

本2事例においては、これまでの対人恐怖症についての研究で指摘されてきた性格の「二面性」についてははっきりとは認められなかったが、「恥ずべき自己」とその防衛とでも表現できるメカニズムが見てとれた。

O君の場合、医師を目指したり、高い成績を目指したりと、非常に自分に対する要求水準の高いことがうかがわれるが、もう一方には、人のできることも満足にできないという、非常に惨めな自己イメージも存在している。O君が自己に過大な要求を課さなければならないのは、自己愛を満足するためというよりも、〈誰も助けてくれない〉という感覚が強いためである。誰にも頼れないために、いつでも情報を集めて不慮の事態に備えていなければならない。またO

君の自己評価の低さも、そのような不慮の出来事に遭遇して対処できない自分の姿、象徴的には「夏祭り」の準備で役に立てない自分の姿から発生しているものと考えられる。O君にとって「夏祭り」での体験は、誰にも手順を教えてもらえず、自分の無力な姿をまざまざと意識させられる体験であったが、彼はこのような自己イメージを払拭するために、「夏祭り」で無事に役割を遂行することに生活の重点を置いていた。

K君の場合、空手で黒帯を極めたことには、強さに対する強いこだわりがうかがわれるが、これも過去のいじめ体験からくる防衛的態度であり、やはり「誰も助けてくれない」という感覚と関係していると思われる。K君は少なくとも意識の上では、「普通」であることを目指しており、周囲に溶け込むように努力している。しかしながら同時に、K君には過去の拒絶された体験からくる「自分は受け入れてもらえない」という確信があるため、彼にとって「普通」であることは努力を要する特別なことになってしまっている。K君が最も恐れていたのは、孤立させられることであり、それは同時に「普通」でないことを烙印するものであった。

両者とも、「誰も助けてくれない」という孤立無援感が根深くあり、そこから自己完結的な努力に向かわざるをえなかったものと考えられる。彼らの努力は、共同体から拒絶された体験を二度と繰り返さない方向に向いている。O君の場合は情報を得ることが現実対処力の鍵と考えられていたし、K君の場合は強くなっていじめに会わないこと、「普通」になって拒絶されないことが鍵と考えられていた。

この孤立無援感は、鍋田（1997）が「本当の自己」、岡野（1998）が「恥ずべき自己」と呼んだものと密接に関連していると考えられる。鍋田や岡野は、対人恐怖症者に認められる惨めな自己イメージは、自己-対象関係の破綻によって生じていると指摘しているが、これはO君とK君の場合にもあてはまる。

O君の場合は、情報を蓄えることで孤立無援感を防衛し「夏祭り」での雪辱を果たそうとしていたが、結果的に、それは他者との共同性の回復のためではなく他者との交流を最小限にとどめるための情報収集に陥ってしまっている。この場合、他者から切り離されているということが自己完結的な安心感を引き出し、逆に、他者との関わりがわずらわしいと感じられていた。K君の場合はすでに述べたように、「幻想」や「顔が黒く見える」といった訴えが、人から見られることの回避と、訴えが続いている限りは筆者との関係も途切れないという「絆」といった複数の機能をはたしていたと考えられる。しかしながら、それは同時に生身の関わりから疎外されるということも含んでいた。

O君とK君の場合、直接的に感じられているのは共同体からの拒絶された孤立無援感であり、それは共同体とコミュニケーションするべく準備された身体性が、拒絶され中断された感覚であると考えられる。そして、彼らは自分のなかにある「受け入れてもらえない理由」を観念的に探し出し否定することで、共同体とのコミュニケーションを回復しようとするメカニズムを働かせているように思われる。彼らにとって問題であるのは「不調和」なのであるが、共同体との間で生じた身体的不調和を別のものに置き換え、自分を変えることで処理しようとしていたと考えられる。ここから、性格の二面性について考えると、コミュニケーションが拒絶されたという身体的孤立無援感と、その理由を探し出し「否定」という論理的操作を行なうための別水準のコミュニケーションが同時に存在し拮抗している状態として捉えることができる。コミュニケーションに失敗した身体性は行き場を失ったまま覆い隠されるが、その断絶の感覚は癒されずにとどまりくすぶり続けるようである。

2事例の経過から、拒絶された体験を解消するためには、双方向的なコミュニケーションの感覚を回復することが必要であったと考えられるが、来院当初の彼らにおいては、再び拒絶されることへの恐れのために、ひたすら回復せざるを得なくなっていた。

O君の場合はセラピストとしての筆者に「聞いてもらえた」と思えたことを基盤に、最終的には中学時代の同級生とキャッチボールを楽しんだり、アルバイト仲間とお酒を飲みに行き一緒に笑ったりする経験の中で、他者との共同性が回復していった。K君の場合、自助グループや「若者の集い」のメンバーと話し合うなかで徐々に共同性を回復していったと考えられるが、特に最後の回に語られたような怒りを表出しても、拒絶されることがなかったという体験は大きかったと考えられる。(もちろん、筆者との心理療法を介したかかわりも大きな役割を果たしたと考えられるが、このような観点については鍋田(1997)など他の論者を参考にさせていただきたい。)

4. コミュニケーションとしての「怒り」

O君もK君も共に、最終的には自分を受け入れてくれない共同体に対する怒りを表現してるが、当初は二人とも、共同体に参入できない自分の側の問題としてとらえており、共同体に溶け込むために過剰な努力が行なわれていた。

O君の重要な共同性は「夏祭り」に象徴される。O君の生活の重点は「夏祭り」で無事に役割を遂行することに置かれており、そのために大学のサークルまで選ばれていた。

先述のように、O君にとって「夏祭り」での体験は自分の無力な姿をまざまざと意識させられる体験であったと考えられるが、彼の「できない」「わからない」という自己不全感は、他者とのコミュニケーションの断絶に関係しているともいえる。O君は当初、対人的コミュニケーションを断つことによって共同体との不調和が問題にならないような生活様式を組み立てていたが、共同体と関係をもつ必要性が強まるにつれて、共同性に参入できない苛立ちが怒りの感情として湧くようになってきた。特に注目すべきことは、O君の「怒り」が「寂しい」という感情をともなって出現したということである。初め他者は、単なる情報の媒体でしかなかったが、そこに共同体に参入できない「寂しさ」を見出すことと並行して「怒り」が体験され、最終的には楽しみを分かち合う存在としての仲間を見出すにいたった。つまりO君においては、怒りが初めから潜伏していたと考えるよりも、共同体との不調和が徐々に形を変えていくプロセスにおいて、コミュニケーションを再開し、共同性を取り戻すような呼びかけとして「怒り」が表出されたと考えられる。

K君の場合「怒り」は、「加害恐怖」という形で中心的な葛藤を形成していた。彼にとって、対人場面は「試合」のような対決場面として体験されていたが、同時に「誰も傷つけない」という思いも強く、大きな葛藤となっている。彼の「幻想」には、〈共同性を破壊するような加害性を隠す〉という中核的なテーマが象徴的に現れている。

O君と比較するとK君はもともと共同体志向が強いように思われ、K君にとって共同体に受け入れられることは彼の存在の基盤となっている。これは、小学校時代の友人関係がへの憧憬が繰り返し語られるように、過去に共同体との一体感を強く感じられていたことが関係していると考えられる。しかしながら、彼の共同体への憧れは、他者に〈裏切られた〉という感覚の裏返しでもある。彼が友情を押し付けていたと語っていることから、裏切られた体験の再演を恐れる気持ちが、堅固な共同体への憧れへと変奏されているように考えられる。しかしなが

ら、K君のなかの〈裏切られた〉という思いは共同体への受身的な順応では解消しきれなかったようであり、〈誰かを傷つけてしまう〉という恐れはK君を裏切った共同体に対する怒りが噴出することへの恐れであると考えられる。

K君は長い間、自分の怒りを統制することができておらず、目つきから怒りが周囲に察知されるのではないと恐れたり、突発的に暴れてしまったりしていた。しかしながら、最終的には友人に裏切られたことへ怒り、自助グループに対して怒るなど、怒りと共に本当の気持ちを表出することができている。これらの体験はK君にとっては共同体との調和を破壊するものであり、痛みの伴う体験であった。しかし、自助グループのメンバーはK君のこのような生の感情の表出をうけとめてくれ、彼は〈傷ついても生きていく〉という形で危機を乗り越えることができた。この体験は彼が、仮面をつけたようなコミュニケーションを捨て去り、生身のコミュニケーションに参入することができるようになった象徴的な体験であったと考えられる。

以上のように、O君とK君の両者において、対人恐怖からの回復のプロセスで「怒り」の表出と並行して共同体とのコミュニケーションのありかたが大きく転換したことが見受けられた。ここから、彼らの「怒り」の表出は、共同体との関係性の変化の一つのメルクマールになると考えられる。

これらの「怒り」は、中久喜（2000）が対人恐怖心性として指摘している「自己愛的怒り」に対応すると考えられる。この「自己愛的怒り narcissistic rage」は Kohut の概念であり、Kohut（1977）では幼少期の「自己－対象の側からの共感の（病理的・病院的）欠陥の結果として生じたもの」と説明されており、「その攻撃性は、（平均的な）共感的反応という環境を提供する自己－対象に対して赤ん坊が要求する際の確固として安定した態度の一構成要素である」とされている。つまり、「怒り」は自己中心的破壊性の発現ではなく、むしろ共感的コミュニケーションへの欲求の発現であると考えることができる¹¹¹。

K君とO君においても、「怒り」は承認をもとめる情動的な「呼びかけ」であり、共同体との新しい絆を結びなおすための契機でもあった。彼らと共同体の関係は、感情を押さえて従属するというものであったのが、他者に呼びかけ、応えるという場に変わった。それは、出来上がった共同体に従属しようとする姿勢から、共にコミュニケーションし、共同性を生成していくプロセスを生きる姿勢への変化ともいえるであろう。

まとめ

対人恐怖症研究における、性格の二面性についての議論と、日本文化との関係についての議論から、対人恐怖症者の心理の本質には、受動的に共同体に溶け込みたいという気持ちと、個人として特別でありたいという気持ちとの葛藤があると考えられた。

対人恐怖症が思春期・青年期において発症し、特に同年齢集団を恐れることを鑑みれば、その時期の仲間関係との関連でどのようなメカニズムが働いているのかという問題は重要であると考えられる。しかしながら、これまでの研究では、この問題について十分に検討されてきたとはいえない。

本論文では、以上のような視点から、対人恐怖症者が共同体との関係で体験している対人的プロセスをよりダイナミックに描き出すことを目的とした。特に対人恐怖症者と共同体との関係という側面に着目して考察した。

筆者が面接を担当した2事例を検討した結果、二人の対人恐怖心性の中核にあるものとして、共同体とのコミュニケーションが断絶しているという感覚である「孤立無援感」が見出された。二人とも生活の中心は、「孤立無援感」を覆い隠すことに費やされていた。O君の場合は、共同体との交流をできるだけ避け、「夏祭り」についての情報を集めることによって、「夏祭り」における共同体との調和を目標にしていた。K君の場合は、「症状」という仮面をかぶり、生身のコミュニケーションを避けることによって、表面上は友人関係に調和できるように努めていた。彼らはともに、自分の中に共同体とのコミュニケーションの断絶の「理由」を探し出し、それを否定するための知的操作性を含んだコミュニケーションにおちいっていたと考えられる。

面接の経過では、一方では筆者との関係で、自分の感情を受け止められる体験を重ね、他方では所属する共同体における自分の位置を確かなものにしていこうかがわれた。最終的には両者とも、「怒り」という形で自分を受け入れてくれなかった共同体に呼びかけ、生身の感情でのコミュニケーションに参入することができるようになった。それは知的操作性を含まない「コミュニケーションのためのコミュニケーション」ということができる。

また、回復の過程の中では同年齢集団との関係が重要な機能を果たしており、特に話し合いによって視点の交換がなされたり、遊びの中で同じ感情を共有したりすることによって、共同体との調和が回復し、生き生きとしたコミュニケーションに開かれていった。

最終的には両者において、対人恐怖からの回復のプロセスで「怒り」の表出と並行して共同体とのコミュニケーションのありかたが大きく転換したことが見受けられた。ここから、「怒り」の表出は、共同体との関係性の変化の一つのメルクマールになると考えられる。これらの「怒り」は、「自己愛的怒り narcissistic rage」(Kohut)に相当すると考えられ、自己中心的破壊性の発現ではなく、むしろコミュニケーション欲求の発現であると考えることができる。承認をもとめる情動のほとばしりである怒りを表出する過程を経て、彼らと共同体の関係は変化した。当初は感情を押さえて従属するというものであったのが、感情を交換し、共同性の生成に関わりあうという姿勢になっていった。

ただし、笠原(1977)が指摘するように、上記のプロセスを無事に完結させるためには、個人的な親密性の体験も必要であると考えられ、それこそが心理療法面接の役割であると考えられる。これについては今後検討していきたいと考えている。

<注>

i 対人恐怖症の時代的変遷

対人恐怖症は日本においてはよく見られる青年期の神経症として論じられてきた。1980年にDSMⅢにおいて「社会恐怖」という概念が提出され、「対人恐怖症」を近縁の症状が欧米文化圏にも存在することが認められて以来、日本文化との関連で対人恐怖について論じる研究者は少なくなっているようであるが、対人恐怖症は時代によって中核的な症状が変転しているという見方は一般的である。

対人恐怖症の時代的変遷は西田(1968)によって指摘されて以来、共通した見解となっている。戦後になってそれまでは中核をなしていた「赤面恐怖症」が激減し、今ではほとんど見られなくなっており、増加したとされる「視線恐怖」「自己臭恐怖」「醜形恐怖」は、従来対人恐怖の中でも重症とされてきていたものである。

西田(1968)はこのような「重症化」の背景として、対人恐怖心性が「恥」から「恐れ」に変化したことをあげている。また西園(1983)は、過去の対人恐怖症者は、対人恐怖の起こる場面に立ち向かったものが

多かったのに対し、今日の対人恐怖症者は「恐れ」の心理が反映して、ほとんどが「恐怖」をひきおこす状況からの逃避、回避、引きこもりの態度など、従来の明確な「対人恐怖」とは異なり、漠然とした多訴のなかに対人恐怖的な悩みが共存している場合が多いことを指摘している。そしてこのような傾向は、従来の対人恐怖症が、社会的な場面で体裁を繕おうと「頑張りすぎる」病であったの対して、近年の対人恐怖症は「頑張りきれない」で、社会的な場面での葛藤を回避するようになってきていることを意味していると述べている。

1990年代に入ってから、中村(2000)によって、「引きこもり」など対人的な不安が生じる場面を徹底的に回避するタイプの対人恐怖も増えてきていると指摘されている。これについて中村は、「『重症型』よりさらに未分化な対人不安がむきだしになったかのようである」と述べている。同様の傾向は、鍋田(1997)も指摘しており、近年の対人恐怖症の特徴として「対人関係のスキルがきわめて固く狭くなっていること」「対人不安の質が違っていること」「自己感覚の希薄さが目立つ症例の増加」の3つをあげている。特に不安の質については、「最近では、対人緊張や対人不安、人と関係がもてないなど対人恐怖症に近似した悩みを抱くケースの治療においては、人とつながれない、あるいは、情緒的な絆を人と持ったことがない深い絶望感とも空虚感とも恐怖感ともいえるような不安が現れるケースが目立つ」と述べている。

中久喜(2000)は、「21世紀には、恐怖そのものを乗り越えるための反恐怖(counterphobic)な行動化が起こるかもしれない。すなわち思春期の子どものたちの「キレル」行動、「加害症」は心の中の恐怖心と戦うための、反恐怖的な行動化であると考えられる」と、近年の中高生の暴力傾向との関連を指摘している。このような中久喜の指摘は、冒頭で触れた小川ら(田中他1994、堀井1995)の調査結果と一致している。小川らは、大学生および中高生を対象に1981年と1991年(中高生は1993年)に、10年以上の感覚をあけて同一の「対人関係質問紙」による量的調査を実施した結果から、「大学生における対人関係における悩みや不安は著しく減弱して」いるのに対し、「中学生は対人不安意識の量的な顕著な増大が認められ、高校生にも増大の傾向は認められた」と結論している。

- ii 中村(2000)はZimbardoの次のような指摘に言及している。「Zimbardoは、今日平均的なアメリカ人は一生の間におよそ14回の移住を経験するという。その結果多くの人間が地縁的共同性、アイデンティティ(世代から世代への)、継続性を失うに至っている。Zimbardoはこうした移住の増加が自己中心的志向、孤独感を醸成させ、結局のところShynessあるいはStranger Anxietyの温床になっているというのである。このことはわが国ばかりでなく米国においても、②の仮定、すなわち地縁の共同体の拡散が対人不安の土壌となることを示唆している。日本の対人恐怖症研究および上記のような指摘を総合すれば、ゲマインシャフト的な共同性の拡散、喪失、あるいはそれを越えた対人関係の広がり、対人恐怖症類似的病態発生を促す1条件として考えられる。」

- iii ただし、中久喜(2000)の考えでは「怒り」と「抑圧」が両親の価値観の取り入れによって準備される側面が強調されており、青年期集団の共同性の欠如については二次的なものであると考えられている。

引用文献

- American Psychiatric Association (1980) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, third edition. Washington, D. C. 高橋三郎他訳(1982)「DSM-III 精神障害の分類と診断の手引」医学書院
- 土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂
- 堀井俊章 小川捷之(1995) 思春期・青年期における対人恐怖意識の時代的推移 上智大学心理学年報19,

- 笠原 嘉 (1969) 人みしり——正視(視線)恐怖症について 精神分析研究 15, 2-9
- 笠原 嘉 (1977) 『青年期——精神病理学から——』 中公新書
- 古賀 勝 (1956) 赤面恐怖症の一例——分析中の自殺企図—— 精神分析研究 3 (7・8), 15-18
- Kohut, H. (1971) The Analysis of the Self. International University Press, New York 水野信義 笠原
嘉 監訳 (1994) 『自己の分析』 みすず書房
- Kohut, H. (1977) The Restoration of the Self. International University Press, New York 本城秀次 笠
原嘉 監訳 (1995) 『自己の修復』 みすず書房
- 近藤章久 (1964) 日本文化の配慮的性格と神経質 精神医学, 6, 13-22
- 近藤喬一 (1985) 日本文化と対人恐怖 『対人恐怖症<精神科MOOK No.12>』 金剛出版, 89-97
- 前田重治 (1956) 対人恐怖症の精神分析 精神分析研究 3 (7・8), 7-10
- 三好郁男 (1970) 対人恐怖症について——「うぬぼれ」の精神病理—— 精神医学 12, 29-34
- 森田正馬 (1974) 『森田正馬全集』 白揚社
- 村上靖彦 (1976) 思春期妄想症について 笠原他編, 青年の精神病理 1, 弘文堂
- 村澤和多里 (2000) 主観的体験からみた対人恐怖状況 教育臨床心理学研究 (創刊号), 127-135
- 鍋田恭孝 (1997) 『対人恐怖・醜形恐怖』 金剛出版
- 中久喜雅文 (2000) 対人恐怖/社会恐怖の精神分析 臨床精神医学 29, 1111-1118
- 中村 敬 (2000) 対人恐怖/社会恐怖の精神病理——多次元的モデルによる考察—— 臨床精神医学 29,
1093-1098
- 西田博文 (1968) 青年期神経症の時代的変遷——心因と病像に関して—— 児童精神医学と疎の近接領域 9,
225-252
- 西園昌久 (1970) 対人恐怖の精神分析 精神医学 12, 375-381
- 西園昌久 (1983) 対人恐怖と手首自傷 青年期の精神病理 3, 弘文堂
- 田中康裕 穂刈千恵 福田周 小川捷之 (1994) 青年期における対人不安意識の特質と構造の時代的推移 心
理臨床学研究 12, 121-131
- 内沼幸雄 (1977) 『対人恐怖の人間学』 弘文堂
- 岡野憲一郎 (1998) 『恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで——』 岩崎学術出版社
- Sullivan, H. S. (1953) The Interpersonal Theory of Psychiatry, Norton & Company Inc. New York 中
井久夫他訳 (1990) 『精神医学は対人関係論である』 みすず書房
- 山村道雄 (1933) 赤面恐怖症に就いて (第一報) 東北帝国大学医学部精神病学研究年報 2, 69-102
- 山村道雄 (1934) 赤面恐怖症に就いて (第二報) 東北帝国大学医学部精神病学研究年報 3, 13-38
- 山下 格 (1970) 対人恐怖について 精神医学 12, 5-14